

胎内往生

山岸恵一

「源内先生、胎内往生って知ってます?」

「ああ、噂は聞いている。谷中のどこかのお寺でやつてるぞうだな。眠るよつに往生できるんていう…」

「ええ、そうですね。谷中の成願寺ってお寺なんですよ」「それが、どこかしたのかい?」

「いえね、そのお寺の住職が、このお店の常連なんですよ。私も何回かお相手したけど、脂ぎつた、しつこくて嫌な坊主でねえ。あんな坊さんのお寺で成仏できるなんて、不思議でしょうがないですよ」「百合之助は色っぽく笑った。百合之助の仕種は、男をまったく感じさせない奇妙な色気があった。

「その坊さんが、幸之助をいたく気に入らしてねえ。幸之助を身請けしたいと、云ってるんです」「身請けか。寺へ身請けされて、何をするんだ」

「寺小姓ですよ。寺で雑用をやりながら、修業して、僧侶になれば、自分の寺を継がせてやる」と、その坊さんは云ってるんですよ」「悪い話ではないと思っが」

「それは源内先生が、成願寺の住職を知らないから、言えるんですよ。幸之助は、嫌がってるんです。幸之助は、私の弟分でかわいがってますから、気の毒で。何とかしてやりたいんですが」

「その寺に引き取られるより、陰間の生活を続けるの方が良いのか」「源内の言葉に、百合之助は複雑な表情をした。源内はそれに気づいて、取り繕うように話を続けた。

「身請けとなるん、かなりのまとまった金が必要だろうが。その坊さんは用意できるものだろうか」

「胎内往生で評判をとってから、羽振りがいいようなんですよ。最近ほ、お店に顔を出す回数も増えましてね。座元も師匠も、お金のえももらえれば、幸之助の意向なんて関係ないですから」「そつか」

「寺に引き取られて、坊さんの慰みものなつても、それを我慢し続けて、僧侶になればいいですけど。あの住職では、幸之助も飽きられて、棄てられるのが落ちという気がするんですよ」

「幸之助には気の毒だが、私もお前もいつしてもやれんだらう」「あ、い」

平賀源内は、百合之助の整った瓜実顔を見つめて言った。きめ細かい肌をした色白の顔に、唇にひいた紅が鮮やかだった。

「そんな色氣のない話は、もついいだろつ。そんなことよじ」

源内は、百合之助に顔を近づけ、その口を吸った。百合之助の口からは、なんとも言えない良い香りがした。普段から百合之助は、肌や口の手入れを怠らなかつた。そのうえ、客に接するときは、木犀丸という香料の混じつた丸薬を口に含む。この丸薬を含むと口臭がまったく消え、何とも言えない芳香を発するのである。

源内は、百合之助の体にのしかかるように豊の上に押し倒していた。源内の興奮を感じ取つて、百合之助の息も荒くなつていた。「先生、あせらないで。臥床の方へ」

二人は起き上がると、屏風の陰へ移り、夜具の上へもつれ合つように倒れ込んだ。ここは、湯島天神の陰間茶屋の二階である。源内は、この陰間茶屋「菊水」の常連であつた。

陰間というのは男娼のことで、若衆、色子なども呼ばれていた。陰間茶屋は、陰間を呼んで、遊興する場所である。陰間は、売色の世話をする抱え屋に所属していた。その抱え屋が、客の求めに応じて、陰間茶屋へ陰間を差し向けるのである。

平賀源内は、この年、安永四年に「江戸男色細見」という江戸の陰間茶屋の案内書を著している。平賀源内と云えば、本草学者、科学者、戯作者であり、あらゆる分野に才能を発揮した奇才として名高い。その源内は、陰間にも精通していたことで知られている。

陰間茶屋の全盛は、元禄期であつたが、安永四年は、それから八十年ほどたつている。「江戸男色細見」によると、全盛期を過ぎたとは言え、芳町、湯島天神などに五十五軒の陰間茶屋があり、江戸には総勢二百三十人ほどの陰間が存在していた。

陰間となる少年は、遊女と同様、諸国から買われてきた破産者の子弟や浪人、貧家の子弟などである。買われる場合には、歌舞伎役者の弟子にすると言つた名目をもつてし、買つ方は旅役者宿、子供稽古所、歌舞伎役者振付師などと称した。陰間として身を立てるには、年少から習練をしなければならぬ。親方に預けられた少年たちは、一流の陰間になるため、様々な指南を受ける。三味線、舞踊、歌謡を仕込まれ、その他、遊芸として必要なもの、茶、碁、将棋、物真似、人形使いなどの仕込みも受けた。陰間は、遊女と同じく売色を職業とするものだから、顔かたちの器量もよくする必要があつた。鼻筋が通らなくて低い鼻の子供は、鼻が高くなるように始終挟まれて、鼻高の顔になるように仕向けられた。また、口の中を清潔にして口臭を防ぎ、腋臭予防のために脇の下を常に洗い清めていた。食物、立ち振る舞い、寝方にまで、指導がいき渡つた。こつして十四、五歳になると、男娼として客に接し、十七、八歳まで勤める。

十九、二十歳は女性の相手をするようになる。陰間を買つ女は、御殿女中と後家たちが主であった。

陰間茶屋の客には、僧侶が多かった。親鸞聖人の唱えた門徒宗は女色を容認していたが、これ以外の宗派の僧侶はすべて「女犯肉食」は厳禁であった。そのはけ口としての男色は黙認されていたのである。陰間と遊ぶためには、ほとんどの手続きが吉原の花魁を買つのに等しく、料金も決して安くはなかった。当時、僧侶は檀家からの収入も多く、金貸し業を営むほどに、生活が裕福であった。修業を重ねた僧侶でも、執拗な性の欲望には耐えられない。危険な女遊びをするよりも、陰間を相手にする方が手軽であった。僧侶が陰間茶屋の第一の客であったため、門前町に陰間茶屋が栄えるという光景が見られた。

ここは、湯屋の二階。風呂から上がった平賀源内は、顔見知りの仏具屋の隠居と、のんびりと将棋を指していた。仏具屋の隠居は、徳二郎と云い、数年前に家督を長男に譲り、悠々自適の生活を送っていた。

乱暴に階段を上がる音がしたかと思うと、聞き慣れた声が源内の耳にとどいた。

「源内先生、お久しぶりです。先生をお探ししてたんですよ」

固つ引きの又蔵だった。又蔵は、将棋盤の横にすわり込んだ。

「親分、何か私に用かい？」

「ええ。お取り込み中、申しわけありません。実は、物知りの先生のお知恵を拝借したいと思ひましてねえ」

将棋盤から目を離さず、源内は言った。「今すぐかい？」

「出来れば。将棋を指しながら結構ですから、あつしの話聞いておくんなさい」

源内は顔を上げ、又蔵を見てうなずいた。又蔵は、隠居の徳二郎の方を見た。

「隠居さんも、よろしいですかい」「はい、どうぞ。私は、一向に構いませんよ」

又蔵は、源内の顔をじつと見た。「源内先生、胎内往生って知ってますっ？」

「ああ、その言葉は、先日、百合之助に聞いたばかりだ」

又蔵はニヤツと笑った。

「百合之助つてのは、先生なじみの色子の？ 先生も相変わらず好きですねえ」

「親分にはわからんだろうが、色子の情は、遊女よりも濃いと云つてな」

「あつしは、本物の女の方がいいですがねえ。そんなことはともかく、源内先生は、具体的に

は、いかに好きですかい？」

「谷中の何とかいう寺で、本尊の中で念仏を唱えながら、眠るように往生するという話だと思
うが」

「その通りでやす。寺は谷中の成願寺、胎内往生したのは、今まで二人です。一人目は、上野
の長屋に住んでいた一人暮らしのじいさん。およそ一月前のことでした。二人目は、十日前で、
神田花房町の質屋『巴屋』の新兵衛という隠居さんです」

「その二人の往生に、何か不審な点でも？」

「不審なものも、そもそも胎内往生なんてもんが、信じられますかい」

「言われてみればそうだが」

「一人目のじいさんの時は、珍しいこともあるもんだ、で済んじまったんです。身寄りのない
年寄りでしたから。遺体の検分もしておりません。二人目は、神田の本店のご隠居ですからね
え。それに同じことが続けてですから、見過ごすわけにはいかなくなりました」

「それにしても、寺の中の事件なら、寺社奉行の管轄で、親分の出番はないでしょう」

「そうなんです。寺社方も手が足りてませんから、現場では町方の応援を仰ぐことになるん
です」

江戸は六割に及ぶ広大な武家地と、一般の庶民の居住地の町、寺や神社の寺社地に分けられ
る。武家地は地方の大名の場合は各藩主が、旗本御家人はそれぞれの頭支配が管轄している。
町地は町奉行の管轄である。町奉行は旗元から選ばれ任命された。町奉行所は、北町奉行所と
南町奉行所の二か所あり、一か月交代の月番制であった。

町奉行の下には与力があり、与力の下には同心が二人ほどついた。同心一人には、十手を持
つ手伝い役の小者が二丁三名つく。岡っ引きは、同心から手札という証明書をもらった民間の
協力者である。何らかの商売を営み、役得目当ての者が多かった。また、岡っ引きには、手下
と呼ばれる子分がいた。

寺社地は老中支配下の寺社奉行の管轄であつる。寺社奉行は定員四丁五名で、譜代大名が任
命された。寺社の犯罪のほとんどは小検使（町奉行の与力格）が同心を伴い、処理していた。
探索や捕り物に際しては、町奉行所に協力を求めていたのである。

源内は、又蔵に尋ねた。「胎内往生された新兵衛さんの遺体は検分したのですか」

「ええ。番屋へ運んで、詳細に検屍しています。先生もご存じでしょうが、二年前」

又蔵が最後まで言つ前に、源内が言った。「蓮華往生ですか？」

源内の言葉に、又蔵は大きくうなずいた。蓮華往生とは、二年前に上総の寺で起こった事件
である。寺の僧侶たちが地元民の信仰心を利用して、眠るように往生できるといふ話を信者た

ちに持ちかけた。希望の信者に高額な料金を払わせ、大蓮台に備えた蓮の花弁に入れる。花弁を閉じて信者の姿を隠すと、台の下から槍で尻を刺して殺し、念仏読経の最中に見事に往生したように見せかけなのである。

「あつしに限らず、寺社方の手の者も、蓮華往生の件が頭にあつたようです。新兵衛さんの遺体は、検屍役の御用医が念入りに検分しました」

「それで、新兵衛さんの遺体には、何か不審な点があつたのですか」

「それが、何も見つからないから困っているんです。まあ、詳しい話を聞いてくださいな」

最初の胎内往生は約一月前、八月十二日に起こつた。場所は谷中の成願寺。住職は淡円といひ、先代から二年前に寺を継いでいた。淡円は、先代住職の甥だが、子供のない先代の養子となつて来た。

胎内往生の主は、上野の長屋に住む銀次という一人暮らしの老人だつた。若い時の放蕩が祟つたのか病気がちで、寝たり起きたりの生活だつた。近所の人も、身寄りのない老人をほつておくわけにはいかず、何かと世話をしていた。銀次の口癖は「早く楽に死にたい」だつた。そのたびに、近所の住人はじいさんの口癖がまた始まつたと笑つていた。半年前から、銀次は暇があると谷中の成願寺に参るようになっていた。その銀次に、成願寺の住職、淡円が胎内往生の話を持ちかけたのである。本人が決心しさえすれば無料だということだつた。銀次は二つ返事で話にのつた。やることは単純で、成願寺のご本尊の阿弥陀如来像の中に入って、念仏を唱えるだけである。本人が極楽往生を願つて熱心に念仏を唱え続ければ、苦しまずに眠るように往生できるという。胎内往生の当日、銀次の住む長屋の住人も五人が立ち会つた。淡円の言葉通り、銀次は阿弥陀如来像の中で昇天した。立ち会つた長屋の住人は、銀次の遺体を見たが、安らかな死に顔だつたという。その死に顔から、誰も不審を抱かず、「不思議なこともあるもんだ」で済んでしまつた。

もちろん、噂になり、町奉行所や寺社奉行所にもその情報ははいつた。寺社奉行所では、手の者を淡円のもとへやり、事情を聞いた。寺社方としては、胎内往生など信じてはいなかつたが、犯罪性はないものと判断した。銀次が、ほとんど文無しで、病気がちの年寄りであり、たまたま偶然が重なつて、今回の胎内往生になつたと結論つけたのだつた。

一番目の胎内往生の主は、神田花房町の質屋「巴屋」の新兵衛である。新兵衛は、三年前に養子に家督を譲り、隠居生活に入つていた。現役時代の新兵衛の評判は芳しくなく、商売ぶりはかなりあこぎだつたと言つ。元々、信仰心は薄く、これまでは神社仏閣にお参りをする事はまつたくなかつた。

その新兵衛が、一年ほど前から労咳を患い、谷中の成願寺にあしげく通うようになった。もともと気が強い男だったが、寄る年波と病で「あっさり成仏したいものだ」と周りに漏らしていた。そうした新兵衛に、淡田が「胎内往生」の話を持ち出した。銀次が見事に成仏した話は評判になっており、新兵衛もすぐに乗り気になった。今回は無料ではなかった。淡田の話では、新兵衛のように財産を持った者は、それを投げ出す覚悟がないと、仏の御加護は得られないといふ。そのため新兵衛は、かなりの額を成願寺に寄進したらしい。当日、成願寺の本堂には、新兵衛の知り合いなどで、十二人が集まった。新兵衛には、巴屋の手代、樹助が付き添った。新兵衛の家族も店の者も、今回の胎内往生は信じていなかった。樹助は、「とりあえず、ご隠居様の道楽に付き合つてこい」と家族と店を代表して、送り出されたのだった。

本堂には本尊の阿弥陀如来が鎮座している。寺男が阿弥陀如来の背中をあげ、新兵衛は中に入った。阿弥陀如来の背中は、開き戸のようになっていた。新兵衛は、数珠を手首に掛け、仏像の中に正座をした。新兵衛が仏像の中に入る様は、寺男の隣に立つた手代の樹助も確認した。その時の新兵衛に変わった様子はなかったと、樹助はその後証言している。住職の淡田は、ずっと阿弥陀如来に向かいあつて座つていた。樹助は、淡田の斜め後ろに席をとつた。阿弥陀如来の体から、ブツブツと声が聞こえてきた。新兵衛がさうそく読経を始めたようだ。それをきっかけに、淡田を中心にして、本堂に集まった人たちは、念仏読経を始めた。淡田の話では、眠るよつに往生出来るはずであった。

樹助たちは、ひたすら読経を続けた。樹助自身は、胎内往生を信じていない。労咳であまり先のないご隠居様の好きにさせるしかない、と諦めていたのである。樹助は、仏像の中の新兵衛の様子が気になって仕方なかった。念仏に集中出来ず、時々辺りを見回したり、後ろを振り返つた。本堂に集まつた樹助以外の人間も同様で、口で念仏を唱えながらも落ち着かず、きよろきよろしていた。振り返つた樹助と目が合つと、にやにや笑つる者もいた。住職の淡田と寺男は、姿勢を崩さず、読経に集中していた。半刻（一時間）ほどたつたころ、淡田は読経をやめ、後ろを振り返つた。樹助たちも読経をやめて、淡田を見つめた。仏像の中からは、物音一つ聞こえてこない。淡田が重々しく口を開いた。

「巴屋のご隠居は、りっぱに往生されました」

本堂にざわめきが起つた。淡田は寺男に目で合図した。寺男は、立ち上がると樹助の顔を見た。樹助も立ち上がった。二人は阿弥陀如来の背後に回つた。仏像の背中を開けて、寺男と樹助は、中をのぞき込んだ。新兵衛は、正座のまま上半身を前方につつ伏していた。「旦那様！

樹助が声をかけても、ぴくりとも動く様子はない。樹助は、新兵衛の上半身を起こして自分

の腕に抱き抱えた。新兵衛の体はまだ暖かったが、明らかに事切れていた。新兵衛の顔に苦しんだ様子はなかった。むしろ安らかな表情をしていた。寺男と樹助が新兵衛の死を確認して、本堂にいるみなに告げると、それぞれに立ち上がったて騒ぎ出した。

「慌てるでない。」隠居は、見事に胎内往生されたのだから、驚くことではない。」

淡田は、本堂にいる人たちを静めようとしたが、誰もが驚きを隠せなかった。本堂にいたほとんどの人間が、以前の銀次の件があるとは言え、胎内往生に半信半疑だった。興味本位で来ていて、実際に目の当りにすると、やはり動揺してしまう。そのうち、二人が近くの自身番に走って、新兵衛の急死を届け出たのである。

自身番は、各町内の警備のために設けられていた番所で、不審の者を捕らえて訊問したり、犯罪容疑者を拘留したりする。今回は寺の中の事件なので、寺社奉行所の管轄である。そのため自身番から町奉行所を通じて、寺社奉行所に連絡がはいった。

その寺社方の依頼で、現場の取り調べを町方が手伝うことになったのである。その中に、又蔵も含まれていた。新兵衛の遺体は自身番に運ばれ、かけつけた検屍の御用医が調べた。不審な傷や毒物を服用したと思われる所見は見当たらず、医者の見立てでは、殺しの可能性はないということであった。新兵衛が以前から労咳を患っていることもあり、おそらく体が衰弱していて、卒中心臓の病による急死と医者は推察した。はっきりした死因は特定出来ずとも、病死ということで、新兵衛の遺体は家族に引き取られていった。

医者が病死と診断したが、これで胎内往生は二度目である。しかも、上総の僧侶による蓮華往生事件のこともあり、寺社方は住職の淡田の取り調べを念入りに行った。だが、結局は住職の行動に不審な点はない、と判断した。淡田は、「ご隠居は、見事に胎内往生されたのです」とくり返した。寺社奉行所は、淡田の説明に納得はしていない。だが、状況と新兵衛の遺体の様子から、犯罪性はないと考えた。

「源内先生、どう思います?」「新兵衛さんの遺体には不審な点はなかったのだらう?」

「ええ。あつしも、番所で新兵衛さんの体を見ましたがね。五体に傷一つないし、検屍の医者も毒を盛られた様子はない、と断言しやした。」

「そつか。死に顔には苦しんだ様子はないのかい。」

「安らかな死に顔と云うんでしょつか。表情は、不思議なくらい穏やかでしたねえ。それに、奇妙なことを云うと思われるでしょうが、肌が何とも良い色でねえ。」

「良い色と言ひつゝ?」

「あざやかな桃色とでも申しましょか。一杯ひっかけ、いい調子になっている酔っぱらいの顔色のようになってます」「全身の肌がかい？」

「ええ、そつですが。新兵衛さんの遺体を見てると、淡田の言う胎内往生も、あながちつそではないように思えてきませんぜ」

「それじゃあ、親分は何で、今頃、探索をしてるんだい」

「寺社方にしても、納得はしていませんよ。それで、町方の手の者で、しばらくは探索を続けるように頼まれちゃってね。もちろん、あつしも今回の件は納得してませんで。あの淡田って坊主が、何とも胡散臭い奴でねえ。このところ、淡田の身辺を探ってるんですよ。一つにはこの淡田が、以前からとんだ色子狂いでねえ」

又蔵は言うてから、しまったという顔をした。源内はすました顔で、又蔵に先を促した。「それだ」

「ええ。淡田は、湯島天神の陰間茶屋の常連なんですけど、最近、陰間の一人を身請けしたいと申し出ているんですよ」

幸之助のことである。源内は黙って又蔵の話に耳を傾けた。

「陰間の身請けにいくらかかるか、あつしは知りませんが、吉原の花魁と変わらないようですよ。かなりの額なんでしょうねえ」

又蔵は、確認するように源内の顔を見つめた。源内がうなずくと、又蔵は話し続けた。

「陰間の身請けの話は、新兵衛の胎内往生の少し前から淡田が云い出してたようです。金が入るあてがあったんでしょうねえ。今回の胎内往生の直前に新兵衛は、成願寺へかなりの寄進をしたようですから。やはり、金が目当てで、淡田が策をめぐらしたと考えるのが自然ですよなえ」

「うん。そつですねえ。でも、死因がわからないとね」「そつなんです」

「ところで、仏像の中は、調べたんですか」「もちろんですな」

「中は、がらんどうなんです」

「はい。あつしは中を見て初めて知ったのですが、ああした仏さんは、木でできてるんですね。外から見ると、わかりませんでした」

「外側は彩色してあるからね。人が入れる大きさとしたら、おそらく寄木造りですね」

「寄木造りですか？」又蔵は意味がわからない様子だった。

「簡単に言うと、形を作ったいくつかの木を組み合わせて、仏像を作る方法なんです」

「はあ、そつですか。さすがに源内先生は、よくご存じで」

仏像の材料は、銅造、塑造、乾漆造、石造、木造があり、時代による流行もあった。木造は、一木造りと寄木造りの大きく二種類の造り方に分けられる。

一木造りは、仏像を一材から彫り出したものである。一本の用材からはみ出す部分、例えば両手や座像の脚などを別材で作っても、頭部と体部が一材から造られていれば、一木造りと呼んだ。一木造りでは、像のひび割れを防ぐため、内割と云って、背面や像底から内部を空洞にすることがあった。

寄木造りとは、頭部、体部を別材にしたり、それぞれに二つ以上の材を寄せ合わせて造る技法である。この方法は内割がしやすく、巨木を用いなくても巨像が容易に製作でき、用材が無駄なく使えるなどの利点があった。寄木造りは、平安時代の末頃から盛んに使われるようになった。

「仏像の中の大きさは？」

「あつしが腰を屈めれば、立っていられるくらいですね。座れば楽に入っていられます。広々とはいきませんが。その阿弥陀さんの背中が、外開きの戸のようになっています」「床の部分は？」

「床は、板張りでしたねえ。その板張りの床は、はがしてまで調べませんが、特別な仕掛けがあるようには思えませんでしたねえ」「床の下は、なんだらうっ？」

「阿弥陀さんの台座の部分ですね。おそろくがらんどつでじょう」「
「仏像の背中を閉めたら、密閉されて窒息するといつことはいかないかね？」

「それはないと思いますがねえ。狭い空間ですが、阿弥陀さんの体には、わずかに隙間はあるようでしたし、背中の扉もわずかな隙間がありました。それに新兵衛さんの死に顔に、苦悶の色はなかったですから。窒息は、やはり苦しむんじゃないですか」「
「そつだらうっね」「田屋の手代の樹助さんは、淡円の斜め後ろで、かなり仏像の近くに座っていたんです。本堂にみんなの読経が響いていたとはいえ、仏像の中で苦しんで暴れたり、物音をたてれば、気づくはずだと言っていましたね。でも、樹助さんが気づくような異常は何もなかった」「
「そつですか。まあ、とにかく成願寺の坊さんが、新兵衛さんを殺めたという証拠はないが、この一連の出来事は、私も府に落ちないですね」

「そつでじょう、先生。あつしも、何とか淡円の尻尾を掴んでやりたいんです。知恵を貸してくださいな」

「わかりました。私も、微力ながら親分のお手伝いをしましょう」

又蔵はきつちり座り直して、源内に深々と頭を下げた。

「ありがとうございます。先生が助けてくれれば百人力だ」

「そんなあ、大げさな。あまり期待されても困りますよ」

「親分、明日にでも、一緒に巴屋に行ってみませんか。手代の樹助さんに話を聞くんです。聞き逃したり、見逃したりしていることが、あるかもしれませんからね」「わかりやした」

二人の話をずっと黙って聞いていた徳二郎が口を開いた。

「もし、「迷惑でなかったら、私も一緒にしてよろしいでしょうか」

「迷惑なんてとんでもない。「隠居さんまで手伝っていただけなんて恐縮です。でも、なんでもまた？」

「新兵衛さんと面識はありませんでしたが、同じ隠居の身、人ごととは思えません。それに、源内先生がどうされるかの興味もありますので」

「わかりやした。ともかく「隠居さんと一緒に来ていただければ、あっしも心強い」

「そうですか、それはありがとうございます。「こんな年寄りでは、お役に立てないでしょうが。親分や源内先生の邪魔にならないようにしていますので、よろしくお願いします」

相談がまとまり、三人は、翌日誘い合わせて、巴屋を訪ねることになった。

巴屋の敷地は、かなり大きく、店構えもりっぱだった。又蔵は店番をしている丁稚に声をかけた。訪れた目的を話すと、その丁稚は店の奥へ人を呼びに行った。奥からは番頭が出てきて、又蔵、源内、徳二郎の三人は、小さな座敷に通された。手代の樹助は、店の用事で外出していた。

四半刻（三十分）ほどして、樹助が顔を出した。樹助は二十代後半と思われる年頃で、実直そうな印象であった。又蔵は、新兵衛の胎内往生の経過を、みんなの前でくり返した。話し終わってから、又蔵は、樹助に向かって言った。

「これが、俺が調べたことと、あんさんから聞いた話のすべてだ。何か抜けていることや、付け加えることはあるかい？」

「そうですね。私の覚えていることはだいたいその通りです。付け加えることですかあ」
又蔵の横から、源内が口を出した。

「樹助さん、どんな些細な事でも良いんです。今又蔵さんが話した以外で気づいた事があったら、おっしゃってください」

「はあ、樹助は、思い出すたびに、額に指をやって考え込んだ。

「そつえば」「何かあるかい」

又蔵は身を乗り出した。源内と徳二郎はじっと樹助の顔を見つめた。

「ご隠居様が、御本尊の背中から入る時なんです。背中を開けた時、中から暖かい風が吹いたような気がしました」「暖かい風？」

「ええ、そうです。その時は、なんだろうと思いましたが、番屋では申し上げませんでした。ご隠居様が亡くなったことと関係ないと思ったもので」

源内は、又蔵に言った。「これは、今回の胎内往生にかかわる重大な事実ですね」

又蔵は、困惑したような表情をした。

「先生は、もう、今回の事件のからくりがわかったのですか」

「いいえ。でも、仏像の中から吹いてきた暖かい風というのは、どう考えても不自然ですよ。何かあるに違いありません。樹助さん、他には？」

「それに関係しているのかもしれませんが、御本尊の体内からご隠居様を連れ出す際のことです。ご隠居様の体が汗ばんでいました」

「そうですか。その時は、仏像の中から暖かい風は吹きましかか」

「その時は気が動転してしまって、はっきりはしませんが、でも、暖かい風は吹かなかったし、御本尊の中も暖かくはなかったと思います」

又蔵と源内は、さらに樹助を問いただしたが、それ以上は新たな事実は出てこなかった。又蔵は、もう一つ納得していなかったが、源内は樹助の話に満足した様子であった。帰りの道すがら、源内は又蔵に言った。

「やはり、胎内往生の裏には、淡田が仕組んだからくりがあるはず。今日の樹助さんの話を聞いて確信しました」

「では先生、もうからくりがわかったのですね」

「おおよそは。でも、これから調べものしなければなりません。親分、しばらく待ってください。はっきりわかったら、私の方から連絡します」

「わかりやした。先生、よろしくお願い致します。楽しみにして待っています」

巴屋を訪問してから三日後、源内と又蔵は徳二郎の隠居所を訪れていた。

「親分、あれから書物などを調べまして、新兵衛さんの死因については、私なりの結論が出ました」

源内は、徳二郎と又蔵に自分の推論を話した。二人は、源内の説明に熱心に耳を傾けた。話し終わった源内は、又蔵に言った。「どうでしょうか」

「いやあ恐れ入りました。さすがに博学多彩な源内先生だけのことはあります。ただ先生の推量を寺社奉行に申し上げても、それだけで淡田をしょっぴくのは難しいと思いますが」「そこでしょね。やはり、現場を押さえなければねえ」

「そのためには、もう一度、淡田に胎内往生を行わせて、その場で証拠を掴まなければ」

「困ですか」「ええ、そうです」

二人のやり取りを聞いていた徳二郎が、突然間に入ってきた。

「その困、私にやらせてくれませんか」

又蔵は、驚いた様子で言った。「こ隠居さん。今、源内先生の話でもわかった通り、危険です。今まで、二人亡くなってるわけですから」

「ええ、危険は承知の上です。私も長年仏具屋を営んできて、お寺さんとも深い関係があります。年寄りの信仰心につけ込むような今度の仕打ちは、許せません。どうぞ、協力させてくださいな」「じゃ」

「今は楽隠居の身で、安穩と暮らしていますが。こんな機会にでも、世の中のお役に立てなければ、それこそ罰が当たろうってもんです。どうぞ、お願い致します」

徳二郎は真剣な顔で、熱心に頼み込んだ。又蔵は弱って源内の顔を見た。源内は又蔵に向かって頷いた。又蔵は決心がついたようで、ため息をついてから言った。

「わかりやした。こ隠居さんが、そこまでおっしゃるなら」

又蔵は町方を通じて寺社奉行所に連絡を取った。寺社方は、源内の推論を完全に信じたわけではなが、淡田に対しては疑念を抱いており、困捜査に関しては賛成の意向であった。

翌日、源内と徳二郎は成願寺へ出かけた。谷中は天王寺を中心にして、多くの寺が散在している。成願寺は、その天王寺のすぐ裏にあった。小じんまりとした清楚な山門をくぐると、正面に本堂、右手は竹林で、左手には茅葺きの鐘楼があった。本堂は質素だが、豪壮な構えである。本堂の背後に、天王寺の五重の塔がそびえ立っているのが見える。もつそろそろ紅葉が始まる季節の空は、雲一つなく澄んでいた。

源内は、本堂の前で落ち葉を掃く寺男に声をかけた。用件を伝えると、すぐに招き入れられた。本堂に上がると正面に本尊の阿弥陀如来像が見える。口はまた高いが、本堂の中は薄暗く、灯明をつけてないので、本尊の顔ははっきり見えない。本尊は光背はなく、低い蓮台上に載った座像で、いたって簡素な造りの阿弥陀如来であった。今まで、二人の人間がこの仏像の中で命を落としている。源内は、不吉な印象をこの阿弥陀如来像に抱いた。寺男に先導され、源内と徳二郎は仏像を右手に眺めながら、脇の間に足を踏み入れた。二人が腰をおろすと、住職の

淡田はすぐに姿を現した。

徳二郎は、淡田に源内を自分の甥と紹介した。淡田は、四十代と思われる小太りの男で、全身から脂ぎった精力を漂わせていた。源内は、百合之助の「しつこくて嫌な坊主」という言葉を思い出した。徳二郎の「胎内往生をしたい」という頼みに、淡田ははじめ渋った。「生半可な決意では無理ですよ」淡田はもったいぶった表情で言った。

「それはわかっております。私も古い先短い身。現世に未練もございません」

「見事に往生された二人は、胎内往生の日まで毎日のように参拝されていました。それなりの準備も必要ですから」

淡田は、胎内往生のための心構えを語った。二人は、淡田の話に適度に相つちをつつて調子を合わせていた。淡田は、成願寺の歴史や本尊の阿弥陀如来の来歴まで、延々と話した。徳二郎は、頃あいを見計らって言った。

「私も長年仏具の商いをしてきました。ある程度の蓄えもあります。今回の胎内往生のために、すべてを差し出す覚悟を持っております」

金の話が出てからは、胎内往生の話はほとんど拍子に進んだ。淡田は、具体的な寄進の金額と日時をきばきと決めた。源内は、淡田の現金な様子を見て、改めて胎内往生の裏に潜む陰謀を確信した。胎内往生の日時は、十月二十三日、今から六日後と決まった。

帰る際、山門へ向かう途中で源内は立ち止まった。竹林の中をしげしげと見る源内に、徳二郎は尋ねた。「何かありますか？」

源内は振り返り、淡田らが見ていないのを確認してから、竹林の地面を指さして言った。「竹林の中の地面が何か所も掘り起こされていますね」

「そついえは……。何かを埋めたのでしょうかねえ」

源内は、徳二郎の問いにはつきり答えず歩き出した。

「まあ、いずれわかるでしょう」

山門を出てから、徳二郎は源内に云った。

「古い先短いとはいえ、現世に未練たっぷりな身ですから、よろしく願いますね」

徳二郎は云ってから笑い声をあげた。それにつられて、源内も笑った。

「隠居さん、わかりました。危険がまったくないわけではありませんが、間違いが起こる前に、隠居を必ずお救いしますから」

源内の言葉につなずいた徳二郎は云った。

「せつかく谷中まで来たのですから、ちよいと寄り道をしていきますか」

二人は芋坂を下りて、王子街道に出ると、街道沿いの羽二重団子屋に入った。羽二重団子をほおばり、お茶をすすめるうちに、源内は何とものんびりした気分になっていた。

本堂内には、読経の音が響いている。源内は、淡田の斜め後ろに座っていた。本堂の中には、他に男が五人いた。一人は新兵衛の胎内往生に立ち会った寺男で、四人は、又蔵の手下だった。淡田には、徳二郎の店や家族と説明してあった。

本尊の阿弥陀如来像は、低い蓮台の上に座り、穏やかな表情で、源内たちを見下ろしていた。その口もとには、柔らかな微笑が張りついている。以前源内が感じた不吉な印象は、いま見える仏像からは微塵も感じられない。

源内は、淡田の手前、形ばかりの念仏を唱えているが、意識は仏像に集中していた。特に変わった様子はない。淡田は、熱心に念仏読経を続けている。

読経が始まり、四半刻の半分（十五分）経った頃、源内はすくつと立ち上がり、阿弥陀如来像に向かって走った。源内の後に男が二人続いた。淡田は立ち上がって叫んだ。

「何をするんだ、罰当たりめ！」

寺男が、源内たちを押しとどめようとしたが、残った二人の男が押さえ込んだ。仏像の後ろ側に回った源内は、素早く背中を開いた。むつとする熱気が源内の顔をついた。

徳二郎はうつ伏せに倒れ込んでいた。源内が呼びかけても返事はなかった。源内と二人の男は、仏像の中から徳二郎の体を引きずり出した。徳二郎は意識はなかったが、息はあり、脈もすっかりしていた。

「早く、外へ運んで」

源内は、二人の男に指図をした。源内は息を止め、仏像の内部の床の板をはがそうとした。

板は、はめ込まれているだけで、簡単にはずすことが出来た。

「先生、やはり思った通りですか？」

その声に振り返ると、又蔵だった。又蔵と、寺社方の小検使、同心は、本堂の外に隠れていて、源内たちが行動を起こすのを待っていたのだった。

源内が指さした方向には、煌々と炭火が焚かれた丸火鉢があった。

淡田と寺男は寺社奉行所へ連行された。ここで寺社奉行による調べを受けることになる。徳

二郎は、仏像から出され、外の空気に触れて、ほどなく意識を回復した。

徳二郎の話では、仏像の背中が閉められてから、暗がりの中で、念仏を唱えていた。仏像の中は、入った当初からやたら熱かったという。そのうち、徳二郎は意識はあったが、手足を動

かせなくなり、声も出なくなった。ただ、苦しいという感覚はなく、やがて何がなんだかわからなくなったそうだ。気がつく、本堂の畳の上に寝かされ、介抱されていた。源内は、徳一郎に謝った。

「」隠居、申し訳ない。もっと早く助け出すべきでしたね」

「いやいや、今はこうして元気でいられるわけですから。それに、今回私が身を以て味わったために、淡田らの悪巧みを証明できたわけですから」

「確かにそうです。炭火だけを証拠として押さえても、それが人を死に至らしめる証明にはなりませんから。」隠居が、仏像の中での体験を寺社奉行に申し上げれば、淡田の罪は免れます
い

寺社奉行、阿部正隆の向かいにすわった平賀源内は説明をはじめた。

「締め切った部屋で、炭火で暖をとっていた者が死ぬことがあるのは、町方の者や検屍の御用医の間では知られていると思います。今回の事件は、それを悪用したものです」

阿部正隆は、納得しかねるといった表情で源内に尋ねた。

「すると源内殿は、炭火に毒でも含まれていると言つのかね。我々も、寒い折は炭火にあたっているが、倒れたり、死んだ者はおらんが」

「ええ、確かに、そうでしょうね。それは、広い部屋だったり、締め切っていないので、炭火から発生するものの影響が少ないのです」「炭火から発生するものとはなんだね」「私にも、正直言ってわかりません。しかし、もの本に、炭火には時に人体を害する目に見えぬ毒素あり、籠りて徒に暖をとれば死を招く」と書いてあります。おそろく、その毒素の正体はわからないでも、経験的に知られていたことです。私は、湯治場近くの山で発生する硫黄の煙のようなものだ、と推察しております」「硫黄の煙のようなもの」

「はい、山の中で、岩の隙間から何とも鼻をつく臭いの黄色い煙が噴き出していることがあります。そこに近づいて煙を浴びた獣や鳥が死ぬことは、獵師の間では広く知られ、地元の人には恐れて近づきません。この臭い黄色の煙を発生する固まりを硫黄と呼んでおります。炭は、この硫黄と同じく、生き物に害をなすものを発生していると思われれます。ただし、これは、硫黄と異なり、色も臭いもないのです」「なんと恐ろしい」

「そのものの量は少ないので、炭火にあたつたくらいで死ぬ者は普通おりません。しかし、締め切った狭い場所では、それが充満して人を死に至らしめるのです。成願寺の阿弥陀仏の中は、畳半畳分もありませんし、わずかな隙間があると言つても、締め切った状態でしたから」「な

るほう」

「淡円らは、前もって仏像の下の蓮台の中に、おこした炭を入れた火鉢を置いたのです。そして、胎内往生を願う者を仏像内に入れて、締め切ったのです。頃あいを見計らって、本堂で立ち会った衆に『見事に往生された』と宣言するのです。その時は、中にいた者はすでに、こと切れているわけです」「その頃あいは、どうやって知ったのだろうか」

「おそらく、前もって試したのでしょね。又感親分が成願寺の境内の竹林を調べたところ、猫や犬の死骸が何匹も埋めてあったそうです。獣で試してから、人で実行したのです」「なんと罰当たりな事を」

「一件目の上野の御老人も、本番の新兵衛さんに備えて、人間で試したのでしょ。身寄りがなく、財産もない年寄りでしたから。うまくいったので、新兵衛さんを含めた信者たちへの宣伝にもなりました。次は本命の新兵衛さんの胎内往生です。今回、胎内往生が始まって四半刻の半分でご隠居を仏像から連れ出しましたが、すでに意識はありませんでした。おそらく、四半刻で息が絶えると思われる。新兵衛さんの場合は、半刻でしたから、とっくに息絶えて、炭火も燃えつきていたのです」

当時の科学知識からすると、源内の推察は卓越したものであった。現代の科学で考察すると、胎内往生の老人二人の死因は、一酸化炭素中毒であった。

一酸化炭素は無色無臭の気体である。炭火などの不完全燃焼で発生する。人間の血液中には、酸素を運搬するヘモグロビンがある。一酸化炭素は血液中のヘモグロビンと結合し、その酸素運搬機能を阻害する。そのため体組織は内窒息状態になる。一酸化炭素とヘモグロビンの結合力は、酸素とヘモグロビンの結合の約二百十倍の強さとされている。

一酸化炭素中毒においては、意識よりも先に手足の運動機能が障害される。そのため、中毒に気づいても、その場を脱出できずに死に至るのである。

一酸化炭素中毒の死体は、鮮やかな赤色調を呈す。この鮮赤調は、死後時間が経っても保たれる。この色調は、一酸化炭素結合ヘモグロビンの色に基づくものである。

なお、一酸化炭素の比重は空気より僅かに軽い。それ故、下から上の方へ移動する性質がある。淡円は意識していなかっただろうが、炭火を仏像の下の蓮華台に置いたのは、非常に合理的であったと言えよう。

「源内先生、この度の先生の『活躍』、この界限でも大評判ですよ」

百合之助は、障子を閉めるなり言った。

「そんな無粋な話しはやめろ」

そう言いながらも、源内は満更でもない表情をしていた。百合之助は、源内の側に座ると酌をした。

「幸之助も、先生に感謝してましたよ。幸之助が身請けされる前に、あの坊さんの悪事が露見してやぶらぐった」

「うむ。仏の道を説くべき者が、殺生をして金を奪つただから、世も末だ」

「淡円のお裁きはどうなるのでしょうか」

「寺社奉行の阿部様が裁くわけだが、おそろく死罪は免れないだろう」「自業自得ですな」「それにしても、淡円は悪い奴だが、色の道は私と同じなのは気に入らん」

「先生、そんなことおっしゃりますな。あの坊さんは、女犯肉食は厳禁で、仕方なく色子買いに走つたのです。源内先生とは違います」

源内は、百合之助の言葉に頷くと、腰を抱いて百合之助の体を引き寄せた。

「でも、坊さんたちがいなければ、お前たちもおまんまの食い上げだろう」

百合之助は、はにかむような笑顔を見せた。

「先生こそ、無粋な話しはおやめください。今は、先生だけですから」

百合之助は十六歳。陰間としての盛りは過ぎよつとしていた。

源内の生きた安永期まで陰間茶屋は盛んに営業が行われたが、田沼時代に入り、次第に寂れて行った。僧侶の墮落は進み、寺内に女を置いたり、外妾をかこつたり、変装して遊郭に通つ者が多くなつたのだ。田沼時代以後、僧侶の客は陰間茶屋から少なくなつていった。天保の改革で、湯島大神社地の陰間茶屋は一斉に取り払われた。この時期、全国的に陰間茶屋は消滅した。